

聖書：Ⅱペテロ 1：4～7

説教題：神のご性質にあずかる者

日時：2018年1月14日（朝拝）

先週からペテロの手紙第二を読み始めています。1節2節の挨拶に続いて、3節ではさっそく素晴らしいメッセージが語られました。私たちが「いのちと敬虔」に歩むためのすべての力を、主イエスの神としての御力が与えてくださると言われました。イエス・キリストを信じて「いのち」に生かされて「敬虔」な歩みへと私たちは召されています。その私たちは信じた後は自分の力で何とか頑張って行くというのではない。神に喜ばれる敬虔な歩みへと私たちは進むべきですが、そのための力はイエス様がすべて与えてくださるのです。ですから私たちはそのイエス様により頼み、イエス様に力を求めて、「いのちと敬虔」というクリスチャンの道を進んで行くことができるということでした。

さてそれに続く4節には、その私たちの歩みがたどり着くゴールあるいは目標が語られています。そこに「その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました」とあります。「栄光と徳」という言葉は3節に出て来た言葉を受けています。すなわちキリストの栄光と徳です。これによって私たちに与えられた素晴らしい「約束」とは何でしょうか。その中身についてはペテロはここで詳しく述べていませんが、この手紙を見て行く中で、それが何であるかは分かって来ます。3章13節：「しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」1章11節：「イエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを豊かに加えられる」。しかしペテロはここでは約束の中身よりも、その約束が実現する日に私たちがどういう者となるかということに焦点を当てています。それが「神のご性質にあずかる者となる」ということです。

これはどういうことでしょうか。もちろんこれは私たちが将来、神になるということではありません。他の宗教では死んで神になるとか仏になるなどと言われますが、キリスト教はそうは言いません。この世界を造られた神と、被造物である私たちとの間には絶対的な区別があります。ではどういうことでしょうか。まずこれと関連して一緒に語られている言葉から見る方が分かりやすいと思います。ここに「世にある欲のもたらす滅びを免れ」とあります。ここからペテロの関心が道徳的な関心であることが分かりま

す。つまり「神のご性質にあずかる」という言葉も道徳的な関心から語られているということです。ここで「滅び」と訳されている言葉は「腐敗」という意味の言葉です。新改訳 2017 は「欲望がもたらすこの世の腐敗を免れ」と訳しています。欲あるいは欲求は本来良いものとして人間に与えられました。食欲、睡眠欲、性欲などは人間の基本的欲求で、これらがあることによって人間らしい活動ができます。しかし罪を犯した結果、これらの欲求はねじ曲がってしまい、あらぬ方向に暴走するようになってしまいました。そして本来は人間の祝福のために正しく機能すべき欲求が、逆に人間を支配し、間違った方法に導く力となってしまったのです。その欲求また欲望に突き動かされて罪の下にある人間はどんどん腐敗する方向へ進んでいます。そういうこの世の腐敗を免れる者となる。その腐敗から守られ、救い出される者となるということが言われています。

これをより積極的に言い表したのが「神のご性質にあずかる者となる」ということなのでしょう。これは別の言い方をすれば「神に似る者となる」ということだと思います。神になるのではありませんが、神と良く似た者になる。聖書の一番初めの創世記に、人間は神のかたちに造られたと言われています。神はご自身に似せて人を造られたと。つまり人間は神ではないのですが、神を鏡で映し出すような特別の存在として造られたというのです。人間を見ていると神のご性質が分かって来るような、そのような素晴らしい存在として人間は造られたと聖書は語っています。しかし最初の人間は、最初から完全な状態に造られたのではなく、神と共に歩む中で、益々その神のかたちを発展させていくべき者として造られました。ところが人間は罪を犯して墮落してしまいました。本来あるべきところから外れて、最初の人間が持っていた神のかたちとしての輝きを大いに失いました。それが今や全くなくなったというわけではなく、人間が人間である限りそれはまだ残っているとも聖書は語りますが、当初の状態からは考えられないような著しく傷ついた悲惨な状態に落ちてしまったのです。しかし聖書が語る素晴らしいメッセージは、神はだからと言って人間に対するこのご自身の計画を投げ捨てなかったということ。神は私たちが本来のゴールにたどり着く者となるというヴィジョンを捨てないでいてくださるのです。すなわち私たちが「神のご性質にあずかる者となる」という目的あるいは目標を変わずに持っていてくださるのです。その神のヴィジョンがここに語られているのです。

具体的に私たちがあずかる神のご性質とはどのようなもののでしょうか。参考になるものとしてウェストミンスター小教理問答の問4があります。そこでは「神とは、どんな

かたですか」という問いに対して、次の答えが告白されています。「神は霊であられ、その存在、知恵、力、聖、義、善、真実において、無限、永遠、不変のかたです。」ここで神について述べられている性質の中には、神にだけ当てはまるものと、神と私たちの両方に当てはまるものとが述べられています。神にのみ当てはまる性質は無限、永遠、不変です。これは私たちには当てはまりません。私たちは有限な存在ですし、永遠の昔からいたわけではありませんし、変わらない者ではありません。しかし他の属性は、程度の差はもちろんありますが、私たちにも当てはまります。すなわち、知恵、力、聖、義、善、真実など。こういった点において私たちは神ご自身を映し出す者になるということです！今すでに人間である限り、これらの性質をいくらかいただいているとは言え、これらが神の意図にかなって神ご自身を十分に映し出すほどの者にされるということです。まるで神ご自身を見ていると言えるほどの者にされる。それは聖書の他の箇所でも、「キリストに似た者になる」と言われていることと同じです。このような輝かしいゴールが私たちの行く先には用意されています。主を信じる私たちは、主がくださる御力によって、いのちと敬虔の道を歩み、必ずこの最終ゴールにたどり着くようにと導かれている者たちなのです。

さてこのような神の備えについて3～4節で語られた後に、5節以降が「こういうわけですから」という言葉で始まります。神の約束あるいは神の恵みに基づいて、今度は私たちのなすべきこと、私たちの責任が語られます。神は恵みによって私たちを救ってくださるから、私たちは何もしなくていい。ただ受身的に待っていれば良いというのがキリスト教ではありません。神にさせよう！と言って、私たちは何もしないのがキリスト教ではありません。私たちのあらゆる活動の基礎になるのは神の恵みです。しかしその神の恵みに信頼して、そのことに力を得て、あなたがたはあらゆる努力をするように！と5節で語られています。ですから「神の恵み」と「私たちの努力」は矛盾しないのです。神の恵みは私たちをダメな者、怠惰な者とはしないのです。私たちを救う神の恵みは、私たちの意思をも回復します。すなわち神の御心にかなうことを自ら意思し、やる気を持ち、喜びを持ってそれに取り組む心も回復します。神の恵みはそのように私たちに働くのです。

この5～7節には、私たちがあらゆる努力を傾けて追い求めるべき徳目が語られています。全部で8つ出て来ます。これらをどんどん加えなさい！とされています。まずその最初は信仰です。この信仰は1節に出て来たように、私たちが頂いた信仰です。ク

リスチャンであるなら皆持たされているところの信仰です。これがリストの最初に来ていることは何を意味するのでしょうか。それは信仰を持っているというところで止まってはならないということです。それはあくまでスタート地点にしか過ぎません。そこから加えて行くべきものがたくさんあるのです。

2つ目は「徳」。3節にも同じ言葉が出て来ました。すなわちイエス・キリストの徳です。イエス・キリストの道徳的な卓越性のことです。私たちはただキリストを信じていれば良いのではないのです。キリストの徳を映し出す歩みを求めて行くのです。3つ目は「知識」。自分には信仰がある。またキリストにならう道徳的な歩みも心がけている。だからそれで良いかと言うと、そうではなくやはり「知識」を加えて行く必要もある。この手紙では「知識」が重要なキーワードであることを前回申し上げました。信仰を持った時の知識にとどまらず、さらに神とイエスを知る知識が増し加わることを求めて行かなければならない。4つ目は自制。セルフコントロールのこと。先に「欲のもたらす滅びを免れ」とありました。この世にあって私たちの内側には様々な欲との戦いが起こりますが、それらの欲望に負けてしまわないことです。欲望に支配され、振り回されて不本意な生活をするのではなく、自分が自分をコントロールする者となること。それはより強い主人であるキリストに自分を支配していただいてこそ可能になることだと聖書に示されています。ですからガラテヤ書5章の御霊の実のリストにも、これがあげられています。5つ目は「忍耐」。この世には様々な苦しみがあります。まだここは天国ではないからです。そういうこの世にあっては忍耐が必要です。これはすぐキレることの反対です。これは人間的な我慢強さではなく、やはり信仰から生まれて来る忍耐のことです。神に信頼を置くがゆえに培われる粘り強さのことです。6つ目は「敬虔」。3節にもこの言葉は出て来ました。これは神に対するまっすぐな姿勢です。ある人は、これは自分はいつも神の前にあるという自覚だと言いました。神は見えていないだろうと思ったり、神に目をつぶってもらって悪い生き方をするのではなく、いつも神の御前であることを思って、その神に喜ばれるように生きるあり方のことです。7つ目は「兄弟愛」。神への信仰に生きる人は、同じ神を信じる兄弟姉妹を愛する者でなければならずと聖書で言われています。お互いは主イエス・キリストにある神の家族、やがて天の御国で共に住む家族です。そのことを感謝して、今ここにある時から互いに愛し合う歩みのことです。そして最後の8つ目は「愛」。これはギリシャ語のアガペーという言葉で、聖書では特別なニュアンスを持つ言葉です。ガラテヤ書5章の御霊の実のリストの一番最初にもこの言葉が出て来ます。またIコリント13章の愛の賛歌と呼ばれる章でも、こ

の言葉が使われていて、「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です」と言われています。また I ヨハネ 4 章で「神は愛なり」と言われている時の言葉もこの言葉です。相手によらずに、私たち罪人を愛し、ご自分の大切な一人子さえも与えてくださった神の愛。その神の愛を反映する愛を加えなさいと言われています。

これらの 8 つの徳目を見ながら、今日のまとめとして心に留めたいことの一つは「加えなさい」と訳されている言葉についてです。これはギリシャ語ではエピコレゴーという言葉ですが、この背景にあるのはギリシャの演劇に関することです。その昔、人々が楽しめる演劇が催されるためには当然ながらたくさんの費用が必要でした。そのため、コレゴスと呼ばれる比較的富裕な一般市民が、気前良く、自腹を切って、上演費用や合唱隊の訓練費用を負担しました。そこまでも良いものを！最上の演劇を！と彼らは願って、犠牲を惜しまなかったのです。そのコレゴスと同じ言葉、その動詞形のさらに強調したエピコレゴーという言葉がここで使われています。すなわちあのコレゴスと呼ばれる人々が最高レベルの演劇を求めて、そのためには気前よく、身を切ってでも出資したように、クリスチャンもそのように最高の状態を求めて最大限の取り組みをせよということです。そしてもう一つのことは、ここにある徳目はすべて私たちが自分に加えるべきものであるということです。これらのうちのいくつかが見られればまあ良いというのではない。オーケストラの編成のためには色々な楽器が必要です。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスなどの弦楽器、クラリネット、オーボエ、フルート、ファゴットなどの木管楽器、またトランペット、ホルン、トロンボーン、チューバなどの金管楽器、シンバル、太鼓、トライアングル、ティンパニーなどの打楽器。それらを加えて行けば費用も高くなります。しかし素晴らしい演奏のためには、そのような犠牲を惜しんではならない。クリスチャンも最初の信仰があるだけで良しとすることなく、信仰には「徳」を加え、徳にはさらに「知識」を加え、知識にはさらに「自制」を、さらに「忍耐」を、さらに「敬虔」を、「兄弟愛」を、そして「愛」を加えて行くように！と言われています。そのようなところに素晴らしいハーモニーが奏でられて行きます。そしてそこに「神のご性質にあずかる者になる」という最後の状態が現れて行くことになるのです。

私たちは自分を振り返ってどうでしょうか。改めて今日の御言葉を通して持ちたいヴィジョンは、私の前には「神のご性質にあずかる者となる」という素晴らしい将来が備

えられているということです。あまりにも崇高過ぎる目標でしょうか。いやいや私はとてもそんな者ではありませんと言いたくなるでしょうか。しかしこれが神が最初からご計画くださった道であり、また主イエスによって必ず神が到達させてくださるゴールなのです。私たちは信仰を持って自分は救われたと言って、そこで満足し、そこで終わりにしてしまっはなりません。まだまだ進むべき道のりがあります。輝かしいゴールが先に用意されています。神に似た者となるという最後があります。この神の約束を感謝して見上げるがゆえに、あらゆる努力をして一つ一つの徳を加えて行く歩みへ進みたいと思います。そしてこれらをみな豊かに備えて、オーケストラのような豊かなハーモニーを奏でて、神の恵みによって「神のご性質にあずかる者となる」という目標へ向かう歩みへこの年も進みたいと思います。